

JVC

Trial & Error



特集——海を越えた友情・・・
ラオス難民ブンチャンとの出会い
／加藤明彦——ケニアの飢饉
レポート／スーザン・ロズムス

VOL. 3

特集1. 海を越えた友情

ラオス難民ブンチャンとの再会

加藤明彦

「僕が帰国する前日、彼らのうち3人が日本へ行きたいと言い出した。ニコニコしながら言うので冗談かと思ったが、そうではないらしい。そして、何かを期待するような眼で僕を見ている。僕はしだいに不安になってきた……。」

昨年10月、ラオス難民ブンチャン・インタボン(26才)とその家族に面会するため、姫路の定住促進センターを訪ねた。神戸より西へ行くのは生れて初めてだった。最初に僕の前に姿を現わしたのは、ブンチャンの妹ソマイ(14才)だった。受付に頼んでスピーカーで呼び出してもらったのだが、いきなり僕を見て驚いてしまったのか、ソマイは眼を丸くし、ラオス語で何やら意味のわからぬ言葉を口走ると、僕に手招きしながら自分の部屋の方へ走った。

部屋にいたのは、母ブサバイ(43才)とブンチャンの娘ラダワン(1才8ヶ月)だった。僕がバラックの戸をガラガラッと開け、ニョッと顔を出すと、二人とも十和田湖で富士を見たような顔をした。しだいに懐しさがよみがえり、互いに何かを伝えようとしたが、母もソマイも英語が話せず、僕もラオス語はまったくダメだったので、言語による意志の疎通は困難を極めた。というわけで、英語の達人なブンチャンが戻るまでの間僕のことと言えば、二人がかわるがわるすすめる菓子や、「コップチャイ、コップチャイ」(あり

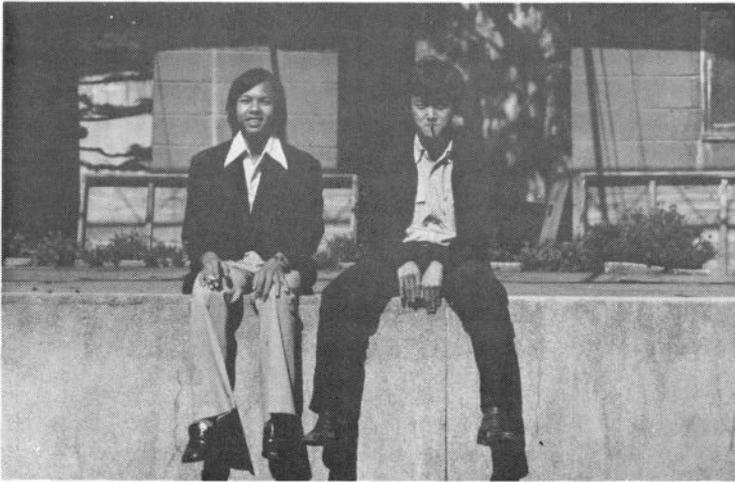
1980年春、二人の若者がタイで巡り会った。一人は国を失った26歳のラオス人。一人は日本から来た22歳のボランティア。さまざまな困難を乗り越えて、いま二人は日本にいる。この手記は、一人の青年がある難民一家を日本に受け入れるまでの軌跡をつづったものである。

がとう)と言って、おいしそうに食べるくらいだった。

30分ほどしてブンチャンが戻ってきた。近くの川へ釣りに行っていただけ。僕を見てもわりとケロットした顔をしていた。案外、僕が来ることを予想していたのかもしれない。それから夕食までの2,3時間、まるで10年ぶりに再会した同郷のおさななじみのように、ふるさとの思い出、ではなくて、ランシットの思い出とか、他の難民のその後の行方、日本に帰っているボランティアのことなどを熱っぽく語り合った。

●ランシットでの出会い

そもそも僕らの出会いは、同年5月、バンコク郊外のランシットという片田舎にあるトランジットセンター(アメリカ、カナダなど第3国への出国待ちをする難民の一時収容所)に始まる。僕はJVCの10数人のメンバーと共にこのセンターに入り、難民の子どもたちを対象としたレクリエーション活動やエンターテインメント等を行った。体操・球技・歌・絵・工作・手芸・フォークダンス・ヒゲダ



いま、ふたり・・・（姫路にて 左がブンチャン）

ンスなどがそのプロジェクトの中心だった。僕は日本を出発する前から絵のセクションを担当するつもりでいろいろと準備を進めていたのだが、現地に着くなり、前からいたルーシーというアメリカ人のボランティアにつかまり、無理やりに音楽セクションを担当させられ、連日連夜、子ども向けの歌の特訓を受けるはめになった。

この頃は、JVCがランシットに入ってからひと月ちょっとというところで、レクリエーション・プロジェクトもちょうど軌道に乗り始めた頃だった。子どもたちも、ボランティアがセンターに入っていくと跳びついて歓迎してくれるようになっていた。そして、難民の若者や大人など、それまであまり僕らと交流することの少なかった人達にも活動に参加してもらおうという「欲」がボランティア達の間で生まれてきたのもこの頃だった。特に、音楽セクションでは、子どもたちに英語の歌を教えるときどうしても英語の話せるラオス人が必要だった。（当時ここに收容されていた4,000人近くの難民のうち、約85%はラオス人だった。）そんなとき、最初に僕らボランティアと難民のパイプ役を買って出てくれたのがブンチャンだった。彼に刺激され、以後15名を越えるラオスの若者が僕らの活動に加わり、歌や体操やヒゲダンスをやってくれた。そして、2週間後には、活動後のミーティングにも参加するようになった。文字通りの難民ボランティアが誕生したわけだ。

●難民一時收容所の大運動会

ことに、5月24日の運動会のとときの彼らの活躍はものすごかった。企画は僕らボランティアによるものだったが38℃の炎天下、指導権を握ったのは、むしろ彼らの方だった。もしも、彼らの力を借りずに、難民の子を叱るのが下手な僕らだけでやろうとしていたら、この運動会は大失敗に終わっていたかもしれない。ともかく、競技は参加子ども数300名というインドシナ難民史上空前の規模で行われた。二人三脚、あめ玉探し、風船割り、玉入れ、綱引きなど、生まれて初めてやる遊びに子どもたちは大喜びしていた。企画の際、子どもたちに戦争の悲しい体験を思い起させぬようにと、ピストルや目かくし、戦闘的な種目の禁止などを真剣に論じあって決めたのだが、体じゅうで喜びを表現してふざけまわる子どもたちを見て、あれは余計な配慮だったかな、と思った。

ラオスの若者たちと僕らボランティアの交流は、それにとどまらなかった。JVCのプロジェクトとは別に、インターナショナル・フォーク・ミュージック・クラブというのをルーシーが中心になって作り、互いに歌を交換しあった。また、UNHCRの人に特別許可をもらい、センターの外へ食事をしに行ったりもした。今考えてみると、あの頃の僕らは「ボランティアと難民」という関係をはるかに超えていたように思う。

●ブンチャンの願い

僕が帰国する前日、彼らのうち3人が日本へ行きたいと言いだした。ニコニコしながら言うので冗談かと思ったが、そうではないらしい。そして、何かを期待するような眼で僕を見ている。僕はしだいに不安になってきた。



フンシットの運動会 あめ玉探し

このセンターはアメリカ、カナダへ出国する難民だけの収容所であるため、日本へ行くためにはもう一度、国境沿いの難民キャンプ（ノンカイなど）へ戻って新たに手続きをしなければならない。そして何よりもまず、日本に定住するためには、非常に厳しい定住条件を満たす必要がある。日本で暮らしたいという3人の気持ちはとても嬉しかったが、だからといって無責任に希望を持たせるのも罪な話だと思い、何とかしてこの3人を説得して断念させなければならないと思った。

しかし、話を聞くうちに、その中にひとりだけ日本の定住条件を満たし得る者がいることに気づいた。言うまでもなくそれがブンチャンだった。彼の場合、次の条項にあてはまるように思えた。

『かつて、在外日本国公館若しくは在外の日本企業等に相当期間雇用されたことのある者であって、確実に呼寄せ人がある者、又は生活を営むに足りると認められる職に就くことが見込まれるもの、及びその者の配偶者、親、又は子。』

後半部分の「呼寄せ人」、「職」というところに問題は残るが、不可能ということはないだろうと思った。彼の話によると、彼は77年6月から78年5月にかけての約1年間、TOYOMENKA Co. LTD.（株式会社トーマン）に雇われ、ビエンチャン郊外のナムグ

ム・ダムの建設工事にたずさわっていたという。そして、そのとき世話になった“FURUKAWA”と“HATAKEYAMA”という二人の日本人の名をあげた。ただ残念なことに、ラオスから脱出して難民となった今、それを証明する手だては何ひとつないということだった。

そんなわけで、結局、僕が日本に帰ってから東京のトーマンを訪ね、ブンチャンに代わってそれを証明するという事になった。翌日、第2ラウンドに大きな課題を残して、ラッシュトをあとにした。

●定住条件の壁

帰国した翌々日、大手町に本社を置くトーマンを訪ねた。受付でいろいろと質問を受けたが、相手を納得させるのには骨が折れた。難民がどうのこうのと言ってもあまりピンとこなかったらしい。産業プロジェクトという課へ案内され、たまたま僕と最初に目が合った人に話を聞いてもらえることになった。非常に期待しながらその人の返事を待ったが、意外にも答はNOだった。つまり、当時ナムグム・ダムの建設工事に従事したラオス人は、ラオス労働委員会というところから頭数何人という形で借りうけた労働者で、従って雇用



ラダワンとお母さん

リストといったものは最初から存在せず、証明は不可能ということだった。又、仮に証明できたとしても、彼らはトーマン直属の従業員だったわけではないから証明書など発行できないし、まして、日本定住後の仕事や生活の面倒を見るつもりもないということだった。FURUKAWA, HATAKEYAMA 両氏の情報についても、トーマンの社員ではなく一時的に雇った大工だから簡単にはわからないと

言った。結局僕は全く相手にされなかったわけだ。

これが学生ボランティアの限界なのかとふさぎこみながら家に帰り、バンコクにまだ残っている徳田さんという女性ボランティアあてに、こうした事情を伝えた日本語の手紙を送った。ブンチャンには彼女から伝えてもらうことにした。なぐさめの言葉を英語でどう表現したらよいかわからなかったし、こういう話は女の方がうまいと思ったからだ。

それからしばらくの間、ブンチャンのことを忘れようと努めたが、手紙の内容を知らされたときの彼の表情を想像すると夜も眠れぬ気持ちだった。「難民なんて、僕らに何も期待してないさ」となぐさめのつもりで言ってくれる人もいたが、そんなふうに言われるとかえって自分の無力さに腹が立った。せめて自分が社会人であれば……などと無駄なことばかり考えていた。

●朗報

6月のある日、思いきって学長を訪ね、ブンチャンのことを相談してみようと思った。もともと僕は、学長らの呼びかけによって参加を決意した上智の難民救援ボランティア・チームの一員だったからだ。(JVCには上智チームとして参加した。)理解ある人だとは知っていたものの、突然こんな話を持ち掛けて迷惑がられるのではないかと気おくれしていたのだが、「わかりました。その難民の面倒は私がみましょう。仕事の世話も大学で何とかしましょう」と言ってくれた。「本当にいいんですか」とこっちが心配して聞き返したくなるほどあっさりとした口調だった。この言葉を聞いて、再びファイトがよみがえってきた。これだけ条件がそろったのだから、トーメンの一件は何としても僕が解決しなければならなかった。

次に、友人のすすめで、赤坂にある外務省の外郭団体のアジア福祉教育財団難民事業本部というところを訪ね、海外青年協力隊OB(ラオス駐在)の開原さんという人に会って



ブンチャン一家

もらった。難民の日本定住に関する詳細を尋ねるのが目的だったが、ここで思わぬ朗報を得た。つまり、6月17日に難民の受入れワクが今までの500人から1,000人に拡大されたのに伴い、難民の定住許可条件も大きく緩和されたということだった。そしてブンチャンの場合、(前にあげた定住許可条件の条項に)新たに付加された次の条項にぴったりと当てはまっていた。

『…上記のほか、かつて日本人と共同して、又は日本人の直接の指揮、指導の下に相当期間働いた者。』

さらに、開原さんの話では、住居や職業など、日本定住後の世話は国がするので、保護者や呼寄せ人がない場合も定住を認めるということだった。国が受入れる以上、難民の生活に関する責任は国が負ってくれるということだった。

この話を聞いたあと、当然のことながら、足はトーメンに向った。先日とは違い、今回は実際にナム・グムダム建設に従事していた森本さんという人のところへ通された。事情はすべて了解してもらえ、ブンチャンのあげた2人の日本人の住所もすぐに調べると約束してくれた。数日後の森本さんの電話でFU-RUKAWA氏は仕事でシリアに、HATAKEYAMA氏は江戸川区西葛西の工務店にいるということを知った。さっそく、西葛西にHATAKEYAMAさんを訪ねた。仕事で疲れていたにもかかわらず心よく僕につきあってくれた。そして、僕が持参したブンチャンの写真と長い間にらめっこをしたあげく、やっと「思い出した!」と言ってくれた。

このことをトーメンの森本さんに報告し、数日後、トーメンの社名入りの確認証を受け取った。7月3日のことだった。



●確認証の発行

『…ラオス人ブンチャン・インタボン(26才)は、弊社が昭和51年1月より昭和53年10月の間、ラオス国電力省との契約に基き実施した、首都ビエンチャンの北方100Km地点のナム・グム発電所建屋増設工事に於て約1年間当社雇用の日本人工畠山忠のもとで型枠大工として建設に従事していたことを添付の写真により確認致します。

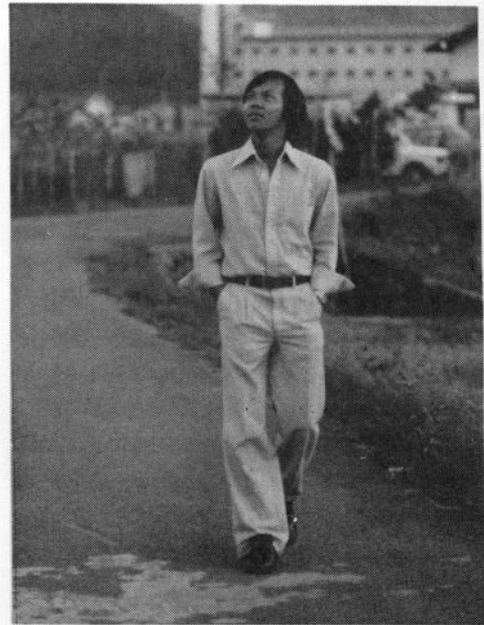
当時は革命直後のラオス政府方針により、当社現場内の全てのラオス人労働者は、ラオス労働委員会(LACO)の管理下にあり、当社は同委員会より有償にて労務提供を受ける立場であり、直接の雇用関係はありません。』というわけで、ひと通り僕の役目は終わり、あとは、バンコクに残るJVCのボランティア達の手を委ねることになった。山下夏美さん、後藤とし子さん他多くの人が大使館やUNHCRとの交渉やブンチャン本人との連絡に奔走してくれたと聞いている。しかし、それから10月までの間、具体的にあの書類がどう処理されたとか、いつブンチャンが日本に来れるのかといった情報はほとんど入ってこなかった。たまたま僕の耳に入ることと言えば、ブンチャンが再びカナダへ行くつもりであるとか、カンボジアの子どもを殴って監禁されたとかいう非常に納得のいかないニュースばかりだった。そして、てっきり、あの話はダメになったのかと思い込んでいた矢先の10月14日、ブンチャンから手紙がきた。何と、HIMEJIからだった。

●ついに日本人へ

ブンチャン一家の日本定住が確定するまで、バンコクではいろいろないきさつがあったと後になって知ったが、ともかく、4人とも本当に日本へ来てしまった。手紙は姫路に到着したその日に書いたらしく、家族4人が無事日本に着いたことだけが簡潔に記されてあった。僕にとっては大きなショックだったが、「やった!」という気持ちよりも、「これからどうなるのだろう」という不安の方が、正直いって大きかった。すべてが自分の思い通りになったにもかかわらず、4人のこれからの日本での生活のことを考えると、手ばなしで喜ぶ気持ちにはなれなかった。「難民が日本に来て本当に幸せになれるのか」という

疑問——今まで何度も自分に問いかけ、すでに答を出したはずの疑問——が新たに、現実として僕に襲いかかってきた。恥かしい話だが、「自分はボランティアの領域を超えてしまったのではないか」、「何か余計なことをしてしまったのではないか」という後悔に似た気持ちもなかったとは言えない。

10月24日の姫路訪問は、そんな僕の思いあがった気持ちを打ち砕くのに十分だった。ブンチャンの通訳でひとりひとりと話し合いながら、日本定住は100%自分たちの意志なんだという気迫を強く感じることができた。とくに自分たちの未来に対しては、僕が圧倒されるほど意欲的だった。ブンチャンは国連の通訳に、ソマイは医者に、お母さんはラダワンの世話をしながら内職をしたいと語った。



●ブンチャン一家の新しい春

ブンチャン一家が日本に来てからもうすぐ4ヶ月になる。手紙の中にも少しずつ日本語がふえてきたし、その後姫路を訪れたボランティアの話では、ラダワンがコンニチワを言えるようになったそうだ。日本語の訓練も間もなく終了する。いよいよ定住促進センターに別れを告げ、自立をめざし、日本の実社会に飛び出す時がやってくる。ブンチャン一家は新しい春を迎えようとしている。

特集2.



子供たちは、空腹と不安で互いに身を寄せ合いながらじっと食糧配給を待つ(ウガンダ)

アフリカ飢饉レポート

いまアフリカでは

いまアフリカでは
干ばつと内乱のため
1,200万人が餓死線に
ある。

- エチオピア 500 万人
- ウガンダ 400 万人
- ソマリア 150 万人
-

同じ地球に住んでいるのにわれわれ日本人だけが幸せでいいのだろうか？



父親に抱かれるこの栄養失調の子供は決して例外ではない(ウガンダ)



ルクセンブルグからエチオピアに送られた医薬品が、これからキャンプに運ばれる

アフリカ大陸では、1973年の北アフリカを中心とした大干ばつに続いて、1979年と80年の2年続きで前回以上といわれる大干ばつが東アフリカを中心として襲っている。

さらに各地の内戦がその被害に拍車をかけている。

このような状況の中で、CRS（カトリック救済事業団）ケニアプログラムで活動中のスーザン・ロズムズさんから、ケニア国内の飢饉状態に関する次のような便りが届いたので紹介します。

長いこと待ちわびていた短い雨季がようやく訪れ、ケニアの中央部は潤いをとり戻しました。どこでもみなほっと一息ついていますが、高地（ハイランド）地方では穀物の種がまかれ、3～4ヶ月中には収穫できるものと期待されています。しかし北西部と東部地域ではいまだに雨が降らず、相変わらず干ばつに悩まされています。

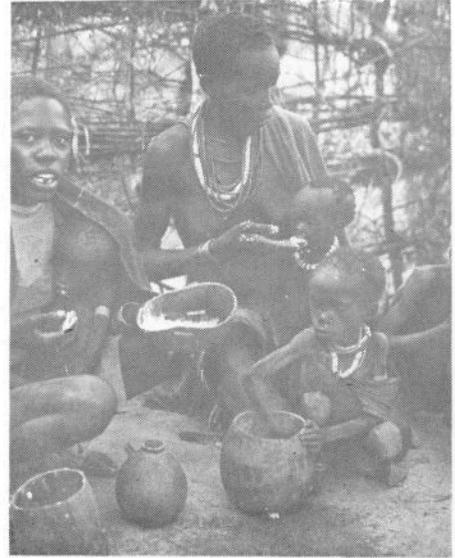


つい先日イシオロからコンソラータ会の神父様がCRS事務局に見え、教区の1,600人の人々のために緊急援助を要請されました。神父様のお話では、人々は1kgの粉ミルクをもらうのに伝導所まで2日もかけて歩いて来るのだそうです。そしてまた2日ばかりで歩いて帰るのです。教区では多数の人が飢えからくる病気で亡くなっています。ケニア政府はこのような苦境に対し外聞を気にするあまりこの種のニュースを公表していません。これではまるで神がこれらの悩める人々により大きな苦しみを与えているようです。それとも神は世界中の善良な人々が悩める人々により一層救いの手をさしのべるように呼びかけているのだと解釈した方がいいのかもしれませんが。

エルドレットの最近のニュースによると、とうもろこしやその他の穀物の90%は干ばつにやられてしまいました。カカメガの人達でさえ、多数ナイロビに粉末とうもろこし(maize meal)を買いに来ています。干ばつ地帯でしかも人口が多いキトウイのような所ではCRSの母子健康栄養促進センターに母親と幼児が多勢押寄せています。飢饉以前の入居者は4,000人でしたが、今では14,000人に達しています。収容能力が拡大されればすぐにでも入居したいと思っている人もまだたくさんいるのです。今は栄養失調の子供達には危険な時期です。雨で風邪をひくことが多く、それが原因で他の病気を併発しがちなのです。2月までは地元で収穫がないため、食糧不足は免れられないでしょう。

北部及び東部地域ではどこでも相変わらず飢饉援助を求める声が聞こえていました。しかし11月には短期間の雨季が訪れ、それまで干ばつに苦しんでいたマルサビットやイシオロ、マチャコス、キトゥイにもようやく雨の恵みが訪れました。マチャコスとキトゥイではこの雨の恵みを得て穀物が植えられました。しかし早くても2月にならなければ収穫の見込みがありません。そしてその収穫も雨が十分降り続けるか否かにかかっています。

マルサビット、サンプル、イシオロでは牧牛が盛んでしたが、今回の雨のおかげでまた牧草が茂り生き残った牛のえさになるでしょう。それにより牧牛生活者の主食である牛乳の供給が豊かになるでしょう。しかしイシオロでは家畜の大部分が死んでしまったので、食糧援助をあと3ヶ月延ばすように求めています。



衰弱したわが子に食物を与える母親
(ウガンダ・カラモジャ州の緊急
避難所)



人々は、食糧・医薬品の緊急援助を求めて
続々と集まってくる(エチオピア)

トゥルカナとカラポコトでは家畜は干ばつで死滅したか侵略で強奪されてしまい、少なくとも5~6万の人が飢饉援助食糧に依存しています。CRS母子食糧栄養促進プログラムは大規模な食糧援助プログラムで、トゥルカナにある20ヶ所のセンターで母親と5歳以下の幼児、計30,000人の援助をしています。そして来月にはカラポコトにもセンターが一ヶ所開設されます。このプログラムでは、毎月家庭用食品として粉ミルク、ブルガー小麦と油を60トン配給します。またCRSがすでに行なっている就学前の幼児対象の「毎日給食プログラム」を補う意味で、同じ項目の食糧を伝導保育園の園児1,000人に配給する予定です。

この記事に関してJ.V.Cに寄せられた募金は、ユニセフ(国際連合児童基金)を通してアフリカの飢饉救済に充てさせていただきます。

なお、募金はJ.V.C郵便振替口座東京9-27495に「アフリカ飢饉救済」と明記の上、お願いいたします。

情報提供; ますぎ みちこ
協 力; 聖心アフリカ研究会
杉内 いづ子
翻 訳; 上智ユニセフ・ボランティアの会
鈴木 泉
写真提供; ユニセフ

タイ概況報告

J.V.C事務局長 星野昌子

本年度、タイ国内を通じてカンボジアへ人道的立場から行う救援のための資金6,400万ドルは、各国からの拠出額を総計しても未だに必要額の半分に満たない状態である。従って今年度半ば過ぎまで救援活動を継続することに支障をきたさぬよう国連は現在引続き資金を募る努力を行っている。

同時にUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）やICRC（国際赤十字）は無駄を省き、援助の適切な優先順位を設定するべく綿密な計画を立てつつある。1月8日には、これらの問題について、サー・ロバート・ジャクソンを議長とする国際機関間の会議がジュネーブで開催された。氏は次回（2月5日）バンコクに於けるCCSDPT会議に出席の予定。またその後2月にかけて、ニューヨークで再度・拠出国代表間の非公式会議が開かれるもようである。



UNICEFはタイ国家安全協議会の方針に合わせて1981年1月1日を以って、国境に於ける食糧の配布量を制限した。以前一人辺り30kgの割り当てであったものが現在15kg、1月2,3両日は牛車で来る人々を対象に、また8,9には徒歩で来た人々に配布が行われたが、牛車の数にはかなりの減少がみられた。



ICRCは公式にそのランド・ブリッジ（国境越しの食料供給）線作への参加を終了、現在食糧を供給しているのはNW-9（キャンプ名）のみとなった。しかし医療活動はVOLUG（民間救援組織の総称）の協力を得つつ国境近辺で行っており、カオイダンの外科チームも存続させる。またカンボジアへの空輸も引き続き行っており、人道的救援の場合のみタイ国家安全協議会もこれを許可する方針である。



またUNHCRは今年度からカオイダンを除き、カンボジア難民収容所の食糧配布・食糧管理・水運搬トラック、収容所建築物の維持・補修等をすべて最高司令部の統合作戦本部が行うことになったと発表した。12月中にアメリカ合衆国、ギャラン（インドネシア）、バターン（フィリピン）、フランス、カナダ、オーストラリア等15ヶ国に4,461人が定住、またホーチン市から直接に772名が別途出国した。



米、ヤシ油、塩、魚の配給
（バン・サンゲ）

最高司令部では、国境の物資分配の重複を避けるため、今後は分配実施の10日前に許可申請を行うこと、クメール系難民一時収容施設に於ける職能訓練は極く初歩的なものに限ること、シキウキャンプのベトナム兵は定住資格を有さない等CCSDPT（タイに於ける避難民に対する救援連絡調整委員会）会議を通じて再確認した。



なお2月2日付バンコクポストは、訪タイ中の中華人民共和国趙首相の記事と並べて「消息筋によれば大量虐殺により国際的不評を買ったクメール・ルージュの指導者キュー・サンファン、ポル・ポト、イェン・サリーが退陣、中国へ亡命を同意、非共産系最大のレジスタンス組織が指導者でありかつての首相リン・サンが、民主カンボジアの長となって統合クメールを率いることになる模様」と報じている。

（2月2日記、2月10日着）

JVCプロジェクト状況

1981年1月23日現在

キャンプ名	進行状況	活動内容	活動費拠出団体	担当者
ウボン	●	自動車整備教習所(生徒数100名、各教師を中心にグループ研修を行なっている)	JVC	●熊岡路矢 浅井芳彦
	●	日本語(初・中・上級の3クラス)、英語(会話を中心に指導)、算数クラス(8~14才対象)の各教室運営	神奈川県	大野直樹 藤山 学
	●	教育レクリエーション活動(歌・体操・ゲーム・遊び道具の貸出しなど)	神奈川県	マリー・マルティタ・キャマル 有江 恵
	●	手工芸品(シュルダールバック、財布等)の購入販売	JVC	金子一弘 カヤ
	○	織物学校の校舎建設(建物のサイズは15m×9m、壁は竹、床はコンクリート、屋根はかやぶき)	茶道裏千家(予定)	山下夏美
ノンカーイ	●	日本語教室(生徒数30名)	上智大学	平賀増美 久保貴弘
	●	教育レクリエーション活動(算数、体育、図工等)	上智大学	高西雅樹 小西正純
	●	学校運営援助	上智大学	田中真理子 清水 稔 青木哲子
ソクラー	◎	排水溝工事(第1期工事、10棟520m)	JVC	※浜口功雄 畠山 信
	●	公衆衛生(各戸にハエ取り紙の配布、使用済トイレトベーパーの焼却)	JVC	古賀道広 原田芙蓉
	●	食糧配給センター新築	JVC	上村ミチヒコ 吉川ノブヒロ
	○	子供の家建設(折り紙、絵画指導のため)	JVC	森ミチカズ
	●	手工芸品(桶)の材料供給と購入、販売	JVC	野口一枝
	●	花壇造設	JVC	
	●	保健衛生(ノミ、シラミ駆除等)	JVC	
	◎	調理用焔炉台造設(子供センターに)	JVC	
	○	キャンプ及びタイ農村への古着配布	JVC	
	○	無人島漂着難民救出(ソクラーの北々東150km)クラ島	JVC	
アランヤプラテート	●	国境周辺の難民村、農村への物資輸送(野菜の種、殺虫剤農具等)	西本願寺	●西崎憲司 田島 誠 村山康弘 河西マリ
	●	CAREの補助食料の補助	西本願寺	
カオイダン	○	自動車整備教習所	UNHCR	●熊岡路矢
	●	井戸掘りの技術指導	UNHCR	養田健一
バナニコム	◎	レクリエーションセンター建設 教育レクリエーション活動(英語、カンボジア語、工作、絵、体操、ラグビー、バスケットボール、カンボジダンス)	神奈川県	相沢秀夫 小泉典江 小池泰明 鈴木ミナミ 川嶋和弘 柳沢道寛
	●	ベトナム人、ラオス人居住区の基礎づくり 子供向け図書館(曹洞宗の協力による)9:00~16:30		
	●	編物教室		
クロントゥーイスラム	●	サッカーグラウンドの整備(スラムの子供たちのために)		●福村州馬 小野博志
	◎	青少年クラブ内に本棚を製作		柴田紀子
	●	図書活動	神奈川県	伊藤浄樹
	◎	青少年クラブにスポーツ用具寄贈		皆川伸彦
	●	電気工養成訓練所(2月2日開所)	JVC	
	●	プラティープ財団への奨学金援助		
	●	通路補修・環境整備	モラロジー研究所	
ブリラム県13ヶ村	●	児童施設建設	神奈川県	●山本敏章 金子哲也
バンコク事務所		星野昌子 横堀雅子 上大塚 田義子 前田貞子 海老原美子 福島弘一 伊東清子 大松村 塚伸子 村井美智子 深谷子 クリス・シュビルマン 上今村 東田 悠子 子 子 子 子 子 子 大石由美子 美松村 信子 子 子 子 子 子 子 リオンマイ 崎雅子 子 子 子 子 子 子 子 子 榎本百合子 花崎 啓子 牧野 千佳子 林 由紀子 竹嶋節子 小黒八小 林 正枝		

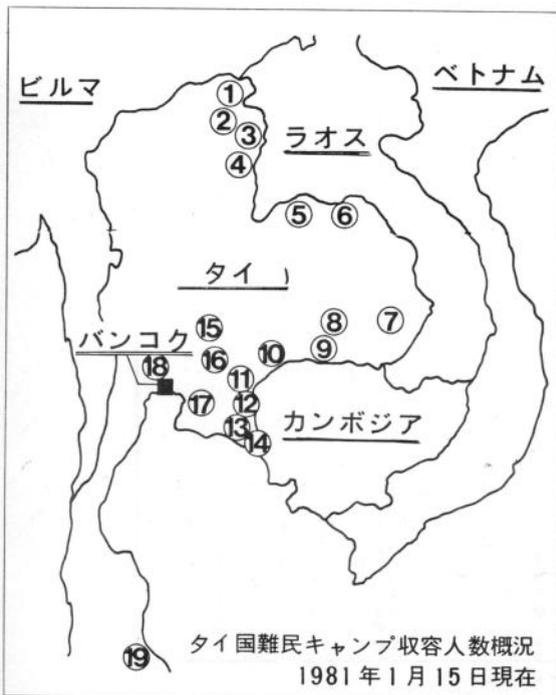
●実施中 ○計画中 ○不定期に活動中 ◎完了 *キャンプリーダー

JVCプロジェクト必要人員一覧表

1980年12月30日現在

	内 容	必要人員	期 間	リ ー ダ ー	備 考
ウボン	自動車整備 ◎織物学校運営	1人 男性1人 女性1人	長 期 長 期	熊 岡 山 青 下 木	自動車整備工資格者
ノンカーイ	◎ノンカーイのリーダー	1人	6ヶ月以上	(森)	英・仏・タイ・ラオス語のうち1つ以上できる人
ソクラー	建築・土木 公衆衛生	男性2人 女性1人	長 期 長 期	浜 口	
アランヤプラテート	供給物資調達・運搬	女性1人	長・中・短 いずれも可	西 崎	詳細は面談の上決定
カオイダン	自動車整備 (大型・普通・二輪) 発電機・発動機・農業機械取扱修理 農業, 河川漁業指導	2人 2人 2人	長期 (3ヶ月以上) (交代でも可)	熊 岡	各種資格者 外国語が1つできる人
クロントゥーイ	大工仕事 教育環境整備 etc. 本のビニールカバーとじ	1~2人 2~3人	1ヶ月以上 短期でも可	福 村	タイ語 (英語も可) できる人 詳細は福村または岩崎へ

◎は至急



	キャンプ名	国 別	今 月	先 月
1	チェンコン	L	4,918	—
2	チェンカム	L	3,452	—
3	パンナムヤオ	L	9,815	10,053
4	ソプトゥアン	L	8,144	—
5	バンビナイ	L	30,005	29,720
6	ノンカーイ	L	27,518	26,895
7	ウボン	L	19,142	19,007
8	ルンバック	K	8,293	—
9	カプチュアン	K	56,673	—
10	カオイダン	K	1,927	76,663
11	アランヤプラテート	K	17,721	3,700
12	カンブット	K	—	15,896
13	ラエムシン	V	11,125	—
14	マイルート	K	—	—
15	シキウ	L V	36,661	—
16	サケオ	K	10,278	35,000
17	パナニコム	K.L.V	3,216	18,000
18	ルンピニ	K.L.V	1,258	—
19	ソクラー	V	4,474	2,860

収容されている難民の国別

K…カンボジア, L…ラオス, V…ベトナム

※「—」は情報未入

移動図書館活躍中

野村耕健（曹洞宗）

曹洞宗は、1980年3月からタイでの活動を行ってきた。今後はJVCと連帯して、なおいっそう活動を広げていきたい。現在、曹洞宗東南アジア難民救済会議（JSRC）は4つのプロジェクトをもっている。移動図書館（Mtl Mobile Trail Library）を主軸に、各キャンプ内の常設図書館設置と運営、クメール語図書を探し出した復刻作業、そしてカンボジア人の手による新しい本の刊行を行っている。

□移動図書館及び常設図書館

サケオを基地としてカオイダン、カンブット、バナニコム、スリン地方のカプチューン、ルンポークを巡回し、1台の車で1ヶ所に1週間程いるので月に約1度の割合で廻ることになる。各キャンプに常設図書館もできた。移動図書館閲覧とカンボジア僧侶の説明によるスライド上映、他に時間があれば子供達と簡単な遊びも行っている。また常設図書館の本の入替え、修理等もする。常設図書館には初めは日本人ボランティアが滞在していたが、今ではカオイダンを除いて管理は難民にまかせている。このプロジェクトはカンボジア難民キャンプ及びタイ国内の小・中学校の教育支援を目的としていたので、キャンプ周辺の村やクロントイ・スラムも廻っていたが、9月からクメール語図書の復刻が始まり、時間がなくなったので中止している。一日も早く活動を復活させたい。

□クメール語図書の復刻

発足当時より、図書の充実を模索していたところ、ほとんど焼き払われてしまったと言われていたクメール語図書がタイ・カンボジア国境に現存しているとの情報を得て、タイ及びカンボジア僧侶の協力で約200冊見付けた。主として仏教書、残りが一般書で、現在これを借りて復刻作業中である。資金面も考え、あと200冊集め400冊は復刻したいと考えている。こ



本を手にする子供たち

のような図書を発見し復刻するには莫大な費用がかかるので、今CONCERN（国連から委託されてクメール語図書復刻の調整をしている団体）と協議中だが、CONCERNがタイの印刷所に頼みたいのに対し、我々はキャンプ内でカンボジア人の手で復刻したいと考え、サケオ・キャンプ内で印刷を始めた。

□新しい本の制作

これはまだ実験段階と言えるが、

サケオで自立意識を高めるために本造りチームを作り、新しい本の制作を始めた。キャンプ外の国境周辺の僧侶にも書いてもらっている。1ヶ月前から始めて、現在3冊でき、サケオで印刷中。

□難民たちの望む本を作る

我々も難民もゼロから始めたのだが、最初はどこでも熱狂的に迎えられた。彼等は、クメール語の本でさえあれば、飛びついて貧るように読んでいた。そして今、我々が待ち望んでいた批評とか注文等が出てきて、彼等がどんなものを望んでいるのかわかり始めてきた。例えば、翻訳の不適當さが指摘されている。我々は、ユネスコの所蔵していたクメール語図書の複製本（500部複製し、500部はユネスコに寄贈したところ、ユネスコは各キャンプにそれを配布した）、タイの義務教育で使用される教科書等の翻訳、及びフランス、イギリス、日本の絵本等で15,000冊揃えて移動図書館をスタートした。そのうち8割は、タイの本の翻訳だった。訳者は、カンボジア僧とクメール語のできるタイの僧侶で、訳し終わると同時に印刷して図書に加えている。しかし、クメール語には王室語・僧侶語・平民語の3種があり、平民語で書かれるべき子供の本が僧侶語になっていた。今後は、キャンプ内で校正作業を続けていき、難民達の満足のいくものにしていきたいと考えている。

「ブリラム県児童施設プロジェクト」始動

第2号でお知らせした「ブリラム県児童施設建設プロジェクト」は、2月7日にプロジェクトリーダーの金子哲也氏がタイに向い、いよいよ始動した。東京では、派遣希望者の為に説明会が1月29日、2月5日、2月12日の3回にわたって開かれ、熱意のある希望者たちが多く参加し、活気に満ちたものになった。

ただ一部には、依頼心の強い誤った姿勢の人もみられたため、ボランティアはあくまで自発性、自主性を重んずるものであって、自分の面倒は自分でみることが奉仕活動をすると思う者の出発点であるということの特に詳しく説明した。その結果、十分趣旨を理解していただき、その困難な使命を自覚して、どんな障害も乗り越えようと決意を新たにしていただけと思う。

したがって参加ボランティアたちは、自分たちで思い思いに出発の日を決め、準備を整え、タイに旅立って行っている。現地においても与えられた仕事をこなすだけという姿勢ではなく、自ら問題点を探り出し、その調査から新プロジェクト立案までやってやろうという意欲的な姿勢で活動に当たっていることとされる。

この「ブリラム県児童施設建設プロジェクト」は3月下旬まで行われる予定。その成果は写真などと共に近時報告できるものと思われる。

(J.K)



次に紹介するのは、説明会に参加された人たちから来たいくつかの便りの中のものである。

正本欽七氏(58)からの便り

前略

先日は説明会に偶然出て、いろいろご意見をうかがいましてありがとうございました。

自立した精神で参加しなければならぬのをあらためて痛感しました。病気の説明をきいているうちに、いろいろ不安になってきましたが、でかけてみることに決心しました。

自分のからだを大事にしながら、みなさんに迷惑をかけないようにがんばるつもりです。注射もやれるものは、みんなやっていく予定です。

申込書を送ります。よろしく願います。2月24日PK 761便で東京外大の中沢さんといっしょにバンコックにむかいます。

追伸：先日の説明会のおり、お菓子代をおいてくるのをすっかり忘れてしまいました。こんどでかけたおりにおいてきます。すみませんでした。

映画案内

カンボジア潜入取材記録

「きょむぬくくあいに」

監督 山谷 哲 夫

3/29 11:00 1:30 4:00

6:00 7:30

池袋東口文芸座ル・ピリエ

☎971-9423

テーマ研究

日本の中の「難民」たち

連載第3回

水野孝昭

●ソクラにて

昨年3月、ソクラのベトナムボートピープルのキャンプで、すり切れた軍服に身を包んだ元政府軍兵士に会った。「俺はアメリカや日本の支援を受けてコミュニストと闘ったのに、何故同盟国日本は受け入れてくれないのか。」と固い表情を崩さず彼は私に問いかけた。

日本は南ベトナムの同盟国ではなかった。しかしノーベル平和賞を貰った日本の首相はアメリカの北爆を支持していたし、カンボジア侵攻をも米軍将兵の命を守るための「自衛権の行使」と支持した。沖縄の米軍基地には爆弾を満載した北爆用のB52が飛来していた。

その翼の下で彼は闘い、敗れた。

難民キャンプで、時に悲しい「笑顔」を見慣れたきた私には、4月のソクラの抜けるような青空、輝く海とは対照的な彼の暗い視線が、今も重く焼きついて忘れられない。

UNHCRのインタビューールームには、ソクラからの各国別受け入れ数が一覧表になって張り出されていた。Japan 1と。

こうしたエピソードを引くまでも無く、日本が難民の定住を認めることに躊躇し、救援活動の出遅れとも相俟って国際的批難を浴びることになったのは記憶に新しい。

現在では他国に比べ受け入れ条件自体はむしろ緩くなっているにも拘らず、一度ダウンしてしまったイメージの回復は難しい。実際の定住許可難民数が一向に増えないこともその背景にあることは言うまでもない。それが何故かは稿を改めて考えよう。

ここでは前回に引き続き、もう一つの「難民の受け入れ」である再定住(Resettlement)許可を与えるに至る迄の経過をふり返ってみよう。

●日本が再定住許可に踏み切るまで

難民の日本定住が最初に閣議に取り上げられたのは難民の上陸を認め始めてから2年余り経過した77年9月20日のことだった。この時の閣議了解「ベトナム難民対策について」に基づき長官を議長としたベトナム難民対策連絡会議が設置されたのだが、「定住等の問題については引き続き今後検討する。」にとどまった。

78年4月28日の閣議了解「ベトナム難民の定住許可について」で下記の条件付で初めて日本への定住許可に踏み出した。

定住希望者は「善良なる社会人として生活を営むと認められる者」であり、かつ1)安定した生活を営んでいる在留外国人の配偶者、親又は子 2)安定した生活を営み、長期にわたり本人の保護者となるにふさわしい善意の者と認められる里親のある里子 3)健康であって、安定した生活を営むに足りると認められる職についており、かつ長期にわたり本人の身分と身元を保証する確実な身元引受人と認められるもののある者及びその配偶者、親又は子、の3つの条件のいずれかを満たしていることが要求された。

この条件が提示された時の一時滞在難民の反応は申請者僅か10名余りにとどまった。これは一つにはボートピープルの間ではとくにアメリカに対する憧れが強烈であることもあるが、日本の側で日本語教育・職業あっ旋等難民が日本社会へ適応するための必須の条件を何ら整えていなかったことがより根本的な原因として挙げられよう。

この時定住許可を受けたのは下関に職を見つけたマイフウロイさんの一家3人だけだった。しかしこの定住許可第一号も後にフランスから定住許可がおりると、日本を去っていった。

大平首相の訪米をひかえた79年4月3日、従来のいわば及び腰の方針を転換、対象をベトナム難民からインドシナ難民に拡大し、「定住を目的とする在留を許可することができる」から「当面500人を目途として、その実現に努める。」と表現も新たにした閣議了解「インドシナ難民の定住対策について」が発表された。海外にいる難民であっても、日本人又は在外外国人の血縁関係者か「かつて在外日本公館若しくは在外日本企業に一年以上雇用されたことのある者又は留学生・研修生等として一年以上日本に適法に在留したことのある者であって、確実な呼寄せ人があって安定した生活を営むに足りると認められる職につくこととなるもの、及びその配偶者、親又は子」であれば、入国が認められることになった。

≡LUCYのアメリカ難民通信≡

昨年4月から7月までJ.V.C.のボランティアとして、ランシット・トランジットセンター（第三国出国待ちの難民たちのための一時収容施設）で、音楽チームを作ったり、ラオス語・英語会話帳の作成をしたり中心的役割を果たしていたLucy Hawleyさんから便りが届いた。

彼女はその後故郷のカンサスシチーに帰り、アメリカ定住難民のために働いている。アメリカ福祉協会発行のRefugee Reports とともに近況を伝える手紙を送ってきた。

「皆さんの努力について書かれているTrial & Errorにとっても興味をひかれました。ただ、とても残念ですが日本語は読めないで誰かに訳してもらおうつもりです。もし英語で書かれたものが何かあれば、送ってください。

私が本当に日本語を読みこなせるようになるまでには、あと10年は勉強する必要があるでしょう。だってMUZUKASHI!

最近できるだけ暇を見つけては、友人のラオス人からラオス語を習っています。今はこの地域で最大の「カンサスシチーインドシナ難民定住センター」で、英語教育プログラムの担当者として14人の先生と共に200人の生徒に英語を教えています。対象はアメリカに着いたばかりで全く英語を話せない17歳以上の大人。（子供は普通の学校に通う。）

何年間も学校に行っていない大人の人たちに改めて英語を教えるのは本当に難しい。名前の尋ね方一つ覚えるのに2週間はかかります。教師には辛抱強さと相手の立場に対する理解とが必要ですが、アジア人に英語を教えた経験者が殆んどいないというのが現状で、様々なトラブルはありますが、それだけに興味深く、やりがいもあります。



子どもたちと遊ぶルーシー
（ランシットにて）

一般的にラオスやベトナムの人達はすぐにアメリカの生活に適応していきます。たとえ英語が話せなくとも、大人は殆んど仕事を見つけ、子供は学校に通います。多くの家庭はやはり生活保護を受けていますが、この福祉政策はレーガン新政権の下ではガラリと変化するかもしれません。そうなったら大変!

来週はカンサスシチーへの初のカンボジア難民グループを100人以上受け入れます。しかし、カンサスシチー在住の難民の数はカリフォルニアやオレゴン程ではありません。昨年の夏、ベトナム人・黒人・メキシコ人の間で大規模な衝突が起き、二人が殺される事件が発生しました。その後たくさんの方が移っていったのです。しかし今は難民ができるだけ早く生活に適応し、自活できるように皆一生懸命努力しています。

仕事が思うようにならず苛々することもあります。そんな時には、タイにいた頃の楽しかった思い出、愉快的な友人達を思い出そうにしています。

J.V.C.に集まっていた日本の人たちとは違って、給料無しでも難民のために働こうとするアメリカ人は殆んどいません。しかし私はラオスの友達からとても多くの大切な事——物事にこだわらない、思いやりにあふれたマイ・ベン・ライ（タイ語）な生き方を学べたと思います。とても素晴らしい。」

（原文は英文 水野孝昭訳）

あなたからのお便り御紹介

スズメのレモンスカッシュコーナー

節分の豆まきも終り、もうすぐお雑祭り、タイでは寒暖計の針が40度をめざして突走っているというのに、我日本はいまだに北風がピーブーと吹きまくっておりますが、みな様いかがおすごしでしょうか？先月中旬、某大新聞に我J.V.C東京リエゾンオフィスが載って以来、みな様より何と150通にも及ぶお問い合わせのお便りをいただき、喜びの非鳴をあげつづけている毎日です。

今回は、キワメツケの心温まるお便り3通を御紹介します。

車イスからの声援

牧 美子

毎日お忙しい事と存じます。

どんなにか時間が足りない人手が足りないと言った思いで充実した日々をお過ごしのことと存じます。

お手伝いが出来たらどんなに生甲斐があろうかと思うのですが、長い闘病の末の車イスの生活で人様に御迷惑かけないようにすることで精一杯でございます。

人情の身にしみる現在、若い方たちのさわやかなボランティア活動の大きく広がることを祈らせて頂いております。

Trial & Errorの本を希望致します。よろしくお願い致します。

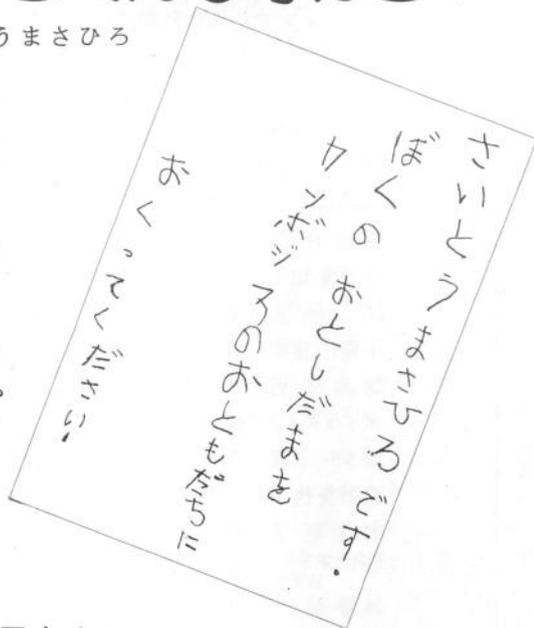
畿関誌に対する御意見御質問その他、日頃考えている事など、明日のJ.V.Cをつくるあなたのお便りこのコーナーにどしどしお寄せ下さい。

(スズメ、こと峰野美智子)

まさひろくん5才から

さいとうまさひろ

真弘の母でございます。5才になります息子が新聞の写真をみて涙ぐんでおりました。話しをしてあげましたらお金を送ってとのこととここで同封致します。私として何も出来ない事を恥て居ります。皆さまのお力で少しでも助けて下さればと思いいペンをとりました。御健闘を心よりお祈り致します。



セーラー服の乙女から

関川 文

なるべくたくさん集まる様努力しています。

それから私の住んでいる近く(といっても柏崎市)にもベトナム難民がいます。

その人たちのための援助活動として昨年の秋、チャリティーコンサートがあり、私も行きました。オルガン演奏会でした。とても素晴らしい演奏を聞きました。しかし、その演奏者の町屋英夫さんやその会場である教会、その他ポスター・チケットを作ってくれた人々は、みんな無益なことを承知でやっているのです。

そういうわけですので、古切手を集める他に、何が私たち学生にもできることがあったら、教えてください。お願いします。

そしてボランティア活動、いつまでも頑張ってください。では……

・・・ 機関誌購読についてのお知らせ ・・・

世界には、まだまだ多くの難民たちが苦しんでいます。この問題が新聞誌上に取り上げられなくなったからといって、決して解決された訳ではありません。難民を考える事がファッションであった時期は確かに終わりましたが、今こそ本当に人間対人間として、この地球に住む人類の一員としてこの問題を捕え、自分の生活の一部として考えていただきたいのです。この機関誌では、生の最新の情報を

伝えまた私たちが考えていかなければいけない問題を掲載し、この問題をみな様とともに考えてゆきたいと思っています。

この運動を息ながく根強くするために年間購読者を募集しております。

2月5日現在の年間購読者は以下の通りです。購読のお申し込みまことにありがとうございます。

増田育江	Bヴェクハウス	吉田由美子	岡本 厚	元岡久美子	能町睦子	木内 洋
藤井未知子	高橋 研	高本百合子	税田芳三★	上智大学外事部	トム・グロウシ	坂田光史
関 隆志	望月ま里	花鳥萬里子	中村洋子	宮田 猛	中川仁志	石路美玲
小宮山雅樹	森下京士	中村龍子	中西ひとみ	石井 彰	高田橋扶美	内藤真理子
師岡文男	本橋 栄	後藤淑子	上谷修一郎	野口雅代	大谷範子	黒岩美知子
ダイコクイン	藤本 篤	川口昌宏	前川昌代	内山正紀	溝口麻里	井上 聡
栗野 鳳	河上滋夫	広戸直江	金子哲也	河井淳一★	日本シルレーボラ ンティアズ	和田節子
栗野美代子	谷本啓一	一色伸夫	水野孝昭	笹瀬真理子	瀬川肖子	権田 潤
田代更子	野口雅未	北松克明	木村真人	田中 博	土井まり子	瀬本正之
東京大学学生 研究所	有馬実成	松岡かおり	峰野美智子	高崎るみ子	高橋和夫	宮崎明子
無藤清子	荻荘則幸	長井道也	谷沢一江	シスター・メリ ー・永島	正本欽也	北川忠男
戸沢布紗子	本居宣千代	岡本寛子	野武久美子	田中真理子	星 由美	井出貴江
吉田明雄★	日本YMCA同 盟国際部	★国際MRA 日本協会	近藤茂則	橋谷叔子	野村滋彦	小沢紀子
相田俊一	山はるみ	武田長久	英 隆一朗	高野義雄	信江慶子	上西寛一
★茶道裏千家 淡交会総本部	和田 純	大久保俊彦	山口二郎	小野崎 潔	御器谷敦子	中村利恵
★世界宗教者平和 会議日本委員会	大場佐知子	川島保男	阿部憲子	藤野達也	井上夫美子	井村寿二
相原 薫★	モラロジー 研究所	高野佐喜恵	横田雅也	恵川綾子	(敬称略：申込順) ★は賛助購読者	
五十嵐幸子	平 浩介	堀 みえ子	山際節子	鈴木淳子		

年間購読者の種別と購読料は次の通りです。

- 賛助購読者 年間1口10,000円
(団体・法人) 1口につき毎月4部送付
- 一般購読者 年間1口3,000円
(個人) 1口につき毎月1部送付

購読者の方々には毎月機関誌「Trial & Error」を送付すると共に、講演会・写真展等のお知らせを致します。

申し込み方法

郵便振替にて。口座番号

東京 3-54186

通信欄に住所・氏名・学校または勤務先を明記のうえ、購読種別と購読開始月をお忘れなくお申し込みください。

☆あなたの善意の送り先☆

J.V.C Tokyo Liaison Office

郵便振替口座 東京9-27495

住所・氏名をかならずお書きそえください。



会計報告

1980. 1981.
12/16 ~ 1/15

(単位はB, 現在1ページ約10円)

内容	収入	支出	残高
前月残			4,637,701 ²⁸
寄付送金	380,043 ²¹		
事業費		693,516 ⁰⁰	
事務経費		72,295 ⁰⁰	
助ける会給与		65,221 ⁵⁰	
計		831,032 ⁵⁰	4,186,711 ⁹⁹
		差引残高	4,186,711 ⁹⁹

○事業費内訳

プロジェクト	内容	金額
ノンカーイ	活動費	17,920 ⁰⁰
ウボン	活動費	18,000 ⁰⁰
織物学校	建設費	4,000 ⁰⁰
カンボジア国境 CAREへ	活動費	133,478 ⁰⁰
ソクラー	補助食料	200,000 ⁰⁰
	活動費	23,730 ⁰⁰
	モラロジー職員による現地調査費	80,590 ⁰⁰
バナニコム	活動費	55,082 ⁰⁰
タイ国内(クロントーイ)	活動費	125,540 ⁰⁰
ブリラム	保母給料・保育所雑費	4,250 ⁰⁰
JVCオフィス		7,240 ⁰⁰
BKKボランティアホーム		5,686 ⁰⁰
	助ける会よりMr. AITKINへの補助立替	10,000 ⁰⁰
	カリタス派遣ボランティアへ航空運賃立替	8,000 ⁰⁰

○今月の寄附送金者(敬称略)

野口利子, 渡辺花子, 佐藤幸子, 蓮見茂行
杉和子, 群馬県佐波郡島小学校, 竜ヶ崎教会
玉野カトリック協会, 坪井ヒロコ, 川崎ロータリー
クラブ(寺尾イワオ), 伊藤久美子, 川口昌宏
松本忠男・好子, 亀山直見, 天理教岐美大教会
小笠原勇二, 白石理, Y M C A, 土屋, 谷沢一江
桜楓会, 千葉健次, 石尾みち子, 船橋第一小学校
P T A 研修部 (以上バンコク)

河井勢以子, セタガヤキリスト教会, 篠原秀郷
野上貞子, 齊藤真弘, T B S 生島アナウンサー
田代更子, 望月ま里, 前川昌代, 佐竹由己子
山下夏美, 山下謙, 加藤進三郎, 川越いつえ
中村洋子, 都立第5商業高等学校女子バスケット
ボール部, 山口県下関市短大生, 田中博
佐藤庸子, 渡辺八重子, 太田みどり, 武井亨
権田潤 (以上東京)

○今月の寄贈者(敬称略)

高田幸一, 津島かおり, 藤田祥子, 入江利恵子
原田利子, 横浜 Y M C A, 榎本百合子, 花嶋晴子
天理教岐美大教会 (以上バンコク)
鈴木淳子 (以上東京)

編集後記

Trial & Error もようやく第3号を迎えた。危い足どりながら, 少しずつ成長をしているように思われる。うれしいことに反響も増えつつある。

ただ, 定期購読者の増え方が思ったよりも芳しくないのが気がかりである。2月5日現在で122人である。

この点について編集部内でも, 現在の編集方針はあまりにも内部的・専門的でわかりにくいのではないか, もっと難民やボランティアたちの素朴な声を載せるべきだ等の問題提起がなされた。

今回はキャンプ情報を削ってみた。あまりに断片的で予備知識のない読者には難しいと判断したからである。そして, 近いうちに一つのキャンプごとに特集を組んで, そのキャンプの歴史, 現状, 問題点などを探る予定である。また, 難民に直接インタビューして,

その意識・心情を浮彫りにするという取材活動も開始した。

これから, Trial & Error はどのような方向に進んで行くのか, まさに試行錯誤というのが現在の状態である。

今回, 「Trial & Error」第3号の編集に携ったメンバーは以下のとおり。

大久保 俊彦 田島 誠
河井 淳一 水野 孝昭
木村 真人 峰野 美智子
税田 芳三 (アイウエオ順)

次回, 第4号は, JVC設立一周年総会が2月27日バンコクで開かれるため, バンコクの事務所において編集をして, マンゴの香りとともに日本の皆様にお送りする予定です。

(じゅんべー)

Photo Library 新設のお知らせ



あなたのアルバムに眠っている写真を送って下さい。JVC東京リエゾンオフィスではフォト・ライブラリーを新設しました。

炎天下、ボランティア活動に汗を流し、ふと振り返ると、そこに真っ白な歯の笑顔があった。はじめの頃は訝しそうに私を見つめていた視線も次第に和らぎ、やがて私たちの活動を見守ってくれる強い味方になっていった。

そんな思い出の中に埋もれている写真、仲間と肩を組んでいる写真でもいいし、難民の生活やキャンプの風景を捕えただけの写真でもかまいません。是非、編集部宛にお送り下

さい。ボランティア個人の記録をもとに、私たちは難民救援活動の歴史を綴っていこうと思っています。

送ってくださる方へ

- サイズはサービス版、同じものを必ず2枚お送り下さい。白黒・カラーは問いません。
- 必要事項は下記のように写真の裏面に記入して下さい。
- 実費は郵便為替にてお支払い致します。また機関誌採用の分につきましては、掲載のたび毎にささやかながら粗品を呈致します。

写真裏面

写した日時	場所
キャプション	

撮影者

——— 新しい事務所がまだ見つかりません ———



先月、第2号でお知らせしましたように、JVC東京リエゾンオフィスでは、事務処理量の増加に伴い、新宿・渋谷付近に広さ15坪程の事務所を捜しています。

皆様の御厚意に期待したのですが、未だに見つかりません。重ねてお願いする次第です。適当な物件を御存じの方は、どうぞ御紹介ください。

Trial & Error 英語版

を近いうちに発行します

英語に自信のある方、編集に興味のある方は是非御連絡下さい。

Japanese Volunteer Center 機関誌 Trial & Error
(試行錯誤)

毎月15日発行

発行人 税田 芳三

編集人 河井 淳一

発行所 J.V.C Tokyo Liaison Office
〒151 東京都渋谷区代々木神園町3-1
OMYC内 JYVA 気付

☎ 03-460-3994

月、木、土 PM5~11

表紙写真 野中 章弘

印刷所 ゆたかプリント

定価1部300円

(諸経費増につき、定価変更しました。)